

# 第6回 予測

村澤 康友

2020年11月10日

## 今日のポイント

1. 真の値の代わりに予測値・推定値を用いることの損失を表す関数を損失関数という。予測子の損失の(条件付き)期待値を与える関数を危険(リスク)関数という。危険関数が最小の予測子が最適。したがって最適予測は損失関数に依存する。
2. 予測誤差の2乗の(条件付き)期待値を予測子の平均2乗誤差(MSE)という。MSE = 2次の損失の危険関数。2次の損失なら条件付き期待値が最適予測。
3. 2次の損失なら最適な  $h$  期先予測値は  $E_t(y_{t+h})$ 。  $\text{var}_t(y_{t+h})$  から予測の信頼区間を作成する。

## 目次

1	統計的意思決定	1
1.1	損失関数	1
1.2	危険(リスク)関数	1
1.3	最適予測	2
2	AR(1)過程の予測	2
2.1	1期先予測	2
2.2	$h$ 期先予測	2
3	AR( $p$ )過程の予測	3
3.1	1期先予測	3
3.2	$h$ 期先予測	3
4	MA・ARMA過程の予測	4

5	今日のキーワード	4
6	次回までの準備	4

## 1 統計的意思決定

### 1.1 損失関数

確率過程  $\{Y_t\}$  の  $h$  期先予測を考える。時点  $t$  までの観測値を所与とした  $Y_{t+h}$  の予測子を  $\hat{Y}_{t+h|t}$  と書く。

**定義 1.** 真の値の代わりに予測値・推定値を用いることの損失を表す関数を損失関数という。

注 1. 経済学における効用関数と同じ(符号は逆)。

注 2.  $L(Y_{t+h}, \hat{Y}_{t+h|t})$  と書く。  $\hat{Y}_{t+h|t} = Y_{t+h}$  なら損失は 0。

**定義 2.** 2次の損失関数は、任意の  $y, \hat{y}$  について

$$L(y, \hat{y}) := (y - \hat{y})^2$$

**定義 3.**  $Y_{t+h}$  の  $\hat{Y}_{t+h|t}$  に対する予測誤差は

$$e_{t+h} := Y_{t+h} - \hat{Y}_{t+h|t}$$

注 3. 2次の損失 = 予測誤差の2乗。すなわち予測誤差の符号に関して対称な損失。

### 1.2 危険(リスク)関数

時点  $t$  までの観測値を所与とした条件付き期待値を  $E_t(\cdot)$  と書く。

**定義 4.** 予測子の損失の(条件付き)期待値を与える関数を危険(リスク)関数という。

注 4.  $\hat{Y}_{t+h|t}$  の危険関数は

$$R(\hat{Y}_{t+h|t}) := E_t(L(Y_{t+h}, \hat{Y}_{t+h|t}))$$

**定義 5.** 予測誤差の 2 乗の (条件付き) 期待値を予測子の平均 2 乗誤差 (mean squared error, MSE) という。

注 5.  $\hat{Y}_{t+h|t}$  の MSE は

$$\text{MSE}(\hat{Y}_{t+h|t}) := \text{E}_t \left( \left( Y_{t+h} - \hat{Y}_{t+h|t} \right)^2 \right)$$

すなわち MSE = 2 次の損失の危険関数。

### 1.3 最適予測

危険関数が最小の予測子が最適。したがって最適予測は損失関数に依存する。2 次の損失なら MSE が最小の予測子が最適。時点  $t$  までの観測値を所与とした条件付き分散を  $\text{var}_t(\cdot)$  と書く。

**定理 1.**

$$\text{MSE}(\hat{Y}_{t+h|t}) = \text{var}_t(Y_{t+h}) + \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right)^2$$

証明。

$$\begin{aligned} & \text{MSE}(\hat{Y}_{t+h|t}) \\ &= \text{E}_t \left( \left( Y_{t+h} - \hat{Y}_{t+h|t} \right)^2 \right) \\ &= \text{E}_t \left( \left( Y_{t+h} - \text{E}_t(Y_{t+h}) - \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right) \right)^2 \right) \\ &= \text{E}_t \left( \left( Y_{t+h} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right)^2 \right) \\ &\quad - 2 \text{E}_t \left( \left( Y_{t+h} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right) \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right) \right) \\ &\quad + \text{E}_t \left( \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right)^2 \right) \\ &= \text{var}_t(Y_{t+h}) \\ &\quad - 2 \left( \text{E}_t(Y_{t+h}) - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right) \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right) \\ &\quad + \left( \hat{Y}_{t+h|t} - \text{E}_t(Y_{t+h}) \right)^2 \end{aligned}$$

第 2 項は 0。 □

注 6. すなわち MSE = 条件付き分散 + 予測の偏りの 2 乗。 □

**系 1.**  $\text{MSE}(\hat{Y}_{t+h|t})$  は  $\hat{Y}_{t+h|t} = \text{E}_t(Y_{t+h})$  のとき  $\text{var}_t(Y_{t+h})$  で最小。

証明。前定理より明らか。 □

注 7. すなわち 2 次の損失なら条件付き期待値が最適予測。

## 2 AR(1) 過程の予測

### 2.1 1 期先予測

簡単化のため  $\{y_t\}$  を定数項なしの AR(1) 過程とする。すなわち任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} y_t &= \phi y_{t-1} + w_t \\ \{w_t\} &\sim \text{WN}(\sigma^2) \end{aligned}$$

簡単化のため母数は既知と仮定する。

**定理 2.**  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$\text{E}_t(y_{t+1}) = \phi y_t$$

証明。

$$\begin{aligned} \text{E}_t(y_{t+1}) &= \text{E}_t(\phi y_t + w_{t+1}) \\ &= \phi y_t + \text{E}_t(w_{t+1}) \\ &= \phi y_t + \text{E}(w_{t+1}) \\ &= \phi y_t \end{aligned}$$

□

注 8.  $\text{E}_t(y_{t+1})$  は点予測値を与える。

**定理 3.**  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$\text{var}_t(y_{t+1}) = \sigma^2$$

証明。

$$\begin{aligned} \text{var}_t(y_{t+1}) &= \text{var}_t(\phi y_t + w_{t+1}) \\ &= \text{var}_t(w_{t+1}) \\ &= \text{var}(w_{t+1}) \\ &= \sigma^2 \end{aligned}$$

注 9.  $\text{var}_t(y_{t+1})$  から区間予測値 (= 予測の信頼区間) を作成する。ただし本来は母数の推定誤差も考慮する必要がある。

### 2.2 $h$ 期先予測

**補題 1.** 任意の  $t$  と  $h \geq 1$  について

$$y_{t+h} = w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \cdots + \phi^{h-1} w_{t+1} + \phi^h y_t$$

証明.

$$\begin{aligned}
y_{t+h} &= \phi y_{t+h-1} + w_{t+h} \\
&= w_{t+h} + \phi y_{t+h-1} \\
&= w_{t+h} + \phi(w_{t+h-1} + \phi y_{t+h-2}) \\
&= w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \phi^2 y_{t+h-2} \\
&= \dots \\
&= w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \dots + \phi^{h-1} w_{t+1} + \phi^h y_t
\end{aligned}$$

□

定理 4.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  と  $h \geq 1$  について

$$E_t(y_{t+h}) = \phi^h y_t$$

証明. 補題より

$$\begin{aligned}
E_t(y_{t+h}) &= E_t(w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \dots + \phi^{h-1} w_{t+1} + \phi^h y_t) \\
&= E_t(w_{t+h}) + \phi E_t(w_{t+h-1}) + \dots \\
&\quad + \phi^{h-1} E_t(w_{t+1}) + \phi^h y_t \\
&= E(w_{t+h}) + \phi E(w_{t+h-1}) + \dots \\
&\quad + \phi^{h-1} E(w_{t+1}) + \phi^h y_t \\
&= \phi^h y_t
\end{aligned}$$

□

定理 5.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  と  $h \geq 1$  について

$$\text{var}_t(y_{t+h}) = \left[1 + \phi^2 + \dots + \phi^{2(h-1)}\right] \sigma^2$$

証明. 補題より

$$\begin{aligned}
\text{var}_t(y_{t+h}) &= \text{var}_t(w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \dots + \phi^{h-1} w_{t+1} + \phi^h y_t) \\
&= \text{var}_t(w_{t+h} + \phi w_{t+h-1} + \dots + \phi^{h-1} w_{t+1}) \\
&= \text{var}_t(w_{t+h}) + \text{var}_t(\phi w_{t+h-1}) + \dots \\
&\quad + \text{var}_t(\phi^{h-1} w_{t+1}) \\
&= \text{var}_t(w_{t+h}) + \phi^2 \text{var}_t(w_{t+h-1}) + \dots \\
&\quad + \phi^{2(h-1)} \text{var}_t(w_{t+1}) \\
&= \text{var}(w_{t+h}) + \phi^2 \text{var}(w_{t+h-1}) + \dots \\
&\quad + \phi^{2(h-1)} \text{var}(w_{t+1}) \\
&= \left[1 + \phi^2 + \dots + \phi^{2(h-1)}\right] \sigma^2
\end{aligned}$$

□

### 3 AR(p) 過程の予測

#### 3.1 1 期先予測

$\{y_t\}$  を定数項なしの AR(p) 過程とする. すなわち任意の  $t$  について

$$\begin{aligned}
y_t &= \phi_1 y_{t-1} + \dots + \phi_p y_{t-p} + w_t \\
\{w_t\} &\sim \text{WN}(\sigma^2)
\end{aligned}$$

定理 6.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$E_t(y_{t+1}) = \phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1}$$

証明.

$$\begin{aligned}
E_t(y_{t+1}) &= E_t(\phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1} + w_{t+1}) \\
&= \phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1} + E_t(w_{t+1}) \\
&= \phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1} + E(w_{t+1}) \\
&= \phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1}
\end{aligned}$$

□

定理 7.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$\text{var}_t(y_{t+1}) = \sigma^2$$

証明.

$$\begin{aligned}
\text{var}_t(y_{t+1}) &= \text{var}_t(\phi_1 y_t + \dots + \phi_p y_{t-p+1} + w_{t+1}) \\
&= \text{var}_t(w_{t+1}) \\
&= \text{var}(w_{t+1}) \\
&= \sigma^2
\end{aligned}$$

□

#### 3.2 h 期先予測

簡単化のため  $p = 2$  とする. すなわち任意の  $t$  について

$$\begin{aligned}
y_t &= \phi_1 y_{t-1} + \phi_2 y_{t-2} + w_t \\
\{w_t\} &\sim \text{WN}(\sigma^2)
\end{aligned}$$

簡単化のため  $h = 2$  とする.

定理 8.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$E_t(y_{t+2}) = (\phi_1^2 + \phi_2) y_t + \phi_1 \phi_2 y_{t-1}$$

証明.  $E_t(y_{t+1}) = \phi_1 y_t + \phi_2 y_{t-1}$  より

$$\begin{aligned} E_t(y_{t+2}) &= E_t(\phi_1 y_{t+1} + \phi_2 y_t + w_{t+2}) \\ &= \phi_1 E_t(y_{t+1}) + \phi_2 y_t + E_t(w_{t+2}) \\ &= \phi_1(\phi_1 y_t + \phi_2 y_{t-1}) + \phi_2 y_t + E(w_{t+2}) \\ &= (\phi_1^2 + \phi_2) y_t + \phi_1 \phi_2 y_{t-1} \end{aligned}$$

□

定理 9.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$\text{var}_t(y_{t+1}) = (1 + \phi_1^2) \sigma^2$$

□

証明.  $\text{var}_t(y_{t+1}) = \sigma^2$  より

$$\begin{aligned} \text{var}_t(y_{t+2}) &= \text{var}_t(\phi_1 y_{t+1} + \phi_2 y_t + w_{t+2}) \\ &= \text{var}_t(\phi_1 y_{t+1} + w_{t+2}) \\ &= \phi_1^2 \text{var}_t(y_{t+1}) + \text{var}_t(w_{t+2}) \\ &= \phi_1^2 \sigma^2 + \text{var}(w_{t+2}) \\ &= \phi_1^2 \sigma^2 + \sigma^2 \\ &= (1 + \phi_1^2) \sigma^2 \end{aligned}$$

□

注 10.  $p, h \geq 3$  の場合も同様だが, かなり複雑. ベクトル・行列を用いると簡単になる.

#### 4 MA・ARMA 過程の予測

反転可能な MA・ARMA 過程は  $AR(\infty)$  で表現できる. したがって母数が既知なら  $\{y_t\}$  から  $\{w_t\}$  が一意に定まり,  $\{w_t\}$  も観測可能とみなせる.

$\{y_t\}$  を平均 0 の MA(1) 過程とする. すなわち任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} y_t &= w_t - \theta w_{t-1} \\ \{w_t\} &\sim \text{WN}(\sigma^2) \end{aligned}$$

定理 10.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$E_t(y_{t+1}) = -\theta w_t$$

証明.

$$\begin{aligned} E_t(y_{t+1}) &= E_t(w_{t+1} - \theta w_t) \\ &= -\theta w_t \end{aligned}$$

□

定理 11.  $\{w_t\}$  が iid なら任意の  $t$  について

$$\text{var}_t(y_{t+1}) = \sigma^2$$

証明.

$$\begin{aligned} \text{var}_t(y_{t+1}) &= \text{var}_t(w_{t+1} - \theta w_t) \\ &= \text{var}_t(w_{t+1}) \\ &= \text{var}(w_{t+1}) \\ &= \sigma^2 \end{aligned}$$

注 11. より高次の MA 過程や ARMA 過程の  $h$  期先予測の場合も同様だが, かなり複雑. ベクトル・行列を用いると簡単になるが, 実際には母数は未知で  $\{w_t\}$  は観測不可能なので, 正確な計算には状態空間モデルとカルマン・フィルターが必要.

#### 5 今日のキーワード

損失関数, 2 次の損失関数, 予測誤差, 危険 (リスク) 関数, 平均 2 乗誤差 (MSE)

#### 6 次回までの準備

提出 宿題 6

復習 復習テスト 6

予習 教科書第 7 章 4.1 節